

第6章 ビーンズ

～親と子がともに育つ場、プレイセンター・ピカソを支える三人組～

はじめに

朝 10 時、とある神社の境内にある自治会集会所に、ある親子は自動車、ある親子は自転車で、そして徒歩で、とめいめい的手段で親子たちが集まってきた。自治会集会所の入り口には、「ピカソ」の看板が掲げられている。自治会集会所に入った親子は受付で出席のスタンプを押し、40 畳の和室と廊下の掃除にとりかかる。それが終わると、小麦粉ねんどや積み木、テントなど和室の中に広げられた幾つもの道具から、子どもたちはそれぞれ自分の好きなものを選び出し、めいめいのペースで遊び始める。これは、プレイセンター・ピカソ（以下、ピカソ）のいつものひとコマである。



写真：プレイセンター・ピカソ会場と看板

このピカソ誕生の裏には、ビーンズという3人組の女性の存在がある。彼女たちは、日本プレイセンター協会^りが2000年10月に実施したスーパーバイザー養成講座でプレイセンターの理念を学び、その後、自身の子育て経験や人脈等を駆使して、2002年9月に都内で初めてのプレイセンターであるピカソをスタートさせた。現在5年目を迎える活動は、その会員数、開催頻度が開始当初に比べ増加していることから見て取れるように、次第に定着しつつある。

そこでここでは、ビーンズがピカソを立ち上げ、そして運営していくにあたって、どのような苦労や工夫があったのか／あるのかを、これまでの経緯及び現在の活動の様子から紐解いてみることにする。なお、以下は2006年10月13日にピカソのスーパーバイザーであるビーンズの足立隆子さん、石川あき子さん、海田みどりさんに行った聞き取り調査の結果等を参考にまとめたものである。

1. 活動の経緯

ビーンズが結成されたのは2001年のことであるが、メンバーの子育て支援活動への参加はそれよりも少し前に遡る。1998年より、足立さんがプレーパーク活動に携わり、子どもたちが自由に遊ぶ場所を作るための仲間作りをしていた。足立さんはその活動を通して、参加者（親）が「お客さん」になってしまうのではなく、主体となって運営をしていく場所の必要性を感じるようになったという。そんな折、新聞で日本プレイセンター協会、そしてスーパーバイザー養成講座を知った彼女が、元々太極拳の会での顔見知りであった海田さん、石川さんに話をしたところ、2人が興味を示したため、3人で受講することとなった。しかし、その後すぐにプレイセンターを開くに至ったわけではない。プレイセンターを開くには、場所はもちろんのこと、プレイセンターの理念に共感し、自らの手で運営していく意思を持った親が必要だからである。

そこでビーンズは、2001年12月から、「エンジョイ！プレイセンター」を2週間に1回のペースで開催することから始めた。この「エンジョイ！プレイセンター」を通じて、プレイセンターの理念を理解し、共感する人々を徐々に増やしていった。その後、「エンジョイ！プレイ

センター」のリピーターを集めて学習会を開き、場所を探した。そうした中で、無人の自治会集会所の存在を知り、地元の人を通じて借りられることになり、2002年5月から7月にかけてプレイセンターを試行した。その後、2002年9月に正式にピカソが発足した。発足当初は毎週水曜日午前10時から12時までの2時間、週1回の開催であり、当時の会員は13家族、16人の子どもとその親たちであった。翌月からは、会員の要望を受けて、週2回（毎週水曜日と金曜日）の開催となった。そして、2006年5月からは、さらにもう一日活動日を増やし、現在の週3回の開催となった。

2. 活動内容と運営資金

(1) 活動内容

ビーンズが行っている活動の内容は主に次の5つ ピカソ、 学習会、 家族で遊ぶ日、 エンジョイ！プレイセンター、そして スーパーバイザー養成講座 である。以下、それぞれについて説明を加える。

ピカソ

ピカソは、現在週3回、毎週月曜日・水曜日・金曜日の午前10時から12時に、国分寺神明宮の自治会集会所にて開催されている。ニュージーランドのプレイセンターの理念に基づき、親の協働運営によって活動は進められている。ピカソでは会員²⁾である親たちが、プレイセンター開催のための準備や片付けをしたり、遊びの種類を考えたり、必要な物を購入したり、と役割分担をしている。役割分担にあたっては、誰か一人の負担が重くなりすぎないように注意し、また、年に一度分担の見直しを行っている。ビーンズの3人は、スーパーバイザーとして運営に参加しており、プレイセンターの場では、子どもと遊んだり、親の相談相手になったりと、あくまで運営をサポートする立場に徹している。



ピカソでは遊びもまた、ニュージーランドのプレイセンターにおける「遊び」の理念に基づいており、決まった遊びは設定されていない。小麦粉ねんど、積み木、ままごと、絵や工作の道具、絵本、パズルなど様々なものが用意され、子どもの情操・五感が育つような環境を整えるように配慮されている。また、自治会集会所前の公園、そして神社の境内の自然も、子どもたちの格好の遊び場になっている。ピカソにやってきた子どもは、これらの環境の中から自分の好きなものを選び、自分の好きな遊び方で遊ぶ。自分の親にべったりとくっついて離れない子どももいれば、逆に子ども同士で部屋の中を走り回るのに夢中な子どももいる。11時40分頃になると、遊びの片付けが始まる。子どもも大人と一緒に箒を持ち、広間の清掃をする。それが終わると、その日の参加者全員で円陣となり、手遊びをしたり、歌をうたったりする（左上写真）。その後、伝達事項を伝え、「さよなら、あんころもち、またきなこ、さようなら」を歌い、解散。これがプレイセンターの一日である。

学習会

学習会は、ピカソに参加している全ての親を対象として行っている、親の学習の場である。現在は、第2金曜日（プレイセンターの活動日のため自治会集会所の別室にて開催）及び第1土曜日（公民館等にて開催）に実施している。学習会の中核を成すのは、プレイセンター入門

コース(全5回)とプレイセンター実習コース(全10回)という、プレイセンター活動に必要な知識及び技術を学ぶためのプログラムである(表1参照)。その際用いられるのは、日本プレイセンター協会が発行しているテキストである(右写真)。全課程を修了するとそれぞれ「プレイセンター入門コース修了証」「プレイセンター実習コース修了証」が発行される。なお、一度修了しても、再度プログラムを受講することは可能で、繰り返し参加する親も多いとのことであった。この学習会をリードするのが、ビーンズの3人であるが、この場合も「先生」として学習内容を教授するのではなく、参加者である親がリラックスして発言できるよう、議論をサポートする役割を担っている。



表1 プレイセンター入門コース及びプレイセンター実習コースの学習テーマ一覧

	<プレイセンター入門コース>	<プレイセンター実習コース>
学習テーマ	①プレイセンターの理念	①子どもの観察実習
	②日本におけるプレイセンター	②遊びのワークショップ
	③プレイセンターの遊び	③子どもに関する施設見学
	④子どもの安全と衛生	④遊びのセッションへの参加
	⑤センター運営に必要な実践的技術	

家族で遊ぶ日

「家族で遊ぶ日」は、月1回、第3日曜日に午前10時から午後6時まで、屋外で遊ぶ催しであり、「小平プレーパーク準備委員会主催『自由遊びの会』」と共催している。昼食持参、出入りは自由となっている。

エンジョイ！プレイセンター

プレイセンター活動を体験する場として、2001年12月以降、「エンジョイ！プレイセンター」を公民館等で開催している。開始当初は月2回、平日午前で開催していたが、ピカソが発足した2002年9月からは月1回、現在は隔月1回の開催となっている。ここでプレイセンター活動に興味を抱いた親子にはピカソの見学にも誘っている。

スーパーバイザー養成講座

「スーパーバイザー養成講座」は、日本プレイセンター協会が2000年より主催している、プレイセンター活動全体のリーダーとなるスーパーバイザーを養成するための講座である。ビーンズの3人はこの第1回目に参加したのち、第2回以降は養成をする側にまわり、現在も通信講座として行われているスーパーバイザー養成講座の実施に関わっている。

(2) 運営資金

ピカソの運営は、主に会員からの会費によってまかなわれている。入会金は学習会に使用するテキスト代を含めて3000円、月会費は一家族1500円となっている。徴収した会費は、会場費、学習会時の保育料、おもちゃ、文具等の消耗品代として使用している。その他の補助金・助成金等による収入は、これまで活動を紹介するビデオや冊子の作成に使用され、そして現在はリーフレットの作成に充てられている。また、学習会に特別講師を招く謝礼等も補助金・助成金から捻出している。

3. ビーンズの活動を支える4つの考え

上述のような経緯で始まった活動であるが、これらの活動を続けていく中で、主にピカソの運営に関して、ビーンズの3人はどのような点を心がけて活動してきた/しているのだろうか。

(1) パーフェクトを目指さない

ビーンズの方々の話しぶりからは、子育てに限らず、プレイセンター運営に係る仕事においても、何もかもを完璧にすることを目指すのではなく、できることをできる範囲とする、という姿勢が窺えた。このことは、彼女たちが会員である親たちに向ける視線「理想形ではなく、その人・その子、そのままの良さを肯定する」にも表れている。沢山の情報に囲まれ、「こうあるべき」という子育ての理想像を描いてしまいがちな親たちにとって、相談役である彼女たちのこういった姿勢が、何よりも安心感を与えているように思われる。

(2) 適材適所

ピカソではニュージーランドのプレイセンター同様、「エマージェント・リーダーシップ」³⁾の考え方に基づき、特定の人の強いリーダーシップではなく、参加者一人一人が適材適所でリーダーシップを取る形をとっている。一枚のチラシを作るに際しても、文章を考える人、パソコンに入力する人、イラストを担当する人、といった形でそれぞれの得意なこと、できることを持ち寄って作業が行われる。これは、親がプレイセンターの運営に参画しているという自覚を持つ上で、重要な意味を持っている。

(3) 一人の人間として親を尊重すること

ピカソでは、親たちは「Aちゃん/Bくんのお母さん」、ではなくニックネームや名前等で呼ばれる。一人の人間として、お互いを尊重しあい、理解を深め合うことを基本としている。こういった雰囲気の中でプレイセンター活動及び学習会が行われることにより、親同士は自らを安心してさらけ出し、自分の問題を共有し、ともに解決していく仲間としての関係を構築していくことができる。かつてピカソの会員であった人々からなるピカソクラブ⁴⁾の存在は、ここで構築された人間関係が一時的なものでないことの証左であるといえよう。

また、ビーンズは子どもと一緒に世界で自分の持っている力を発揮することに意味があると考えており、母親の持っているスキル・特技を活用することを心掛けている。このことは、子育てにおいて親が自らの価値を見出し、自己肯定感を得ることを助けていると考えられる。

(4) 「問題」を学びの糧に

活動をしていく上での問題点について問われた際のビーンズの方々の答えもまた、彼女たちのこれまでの活動を支えてきた基本的な考えの一つをうかがわせるものであった。それは具体的には、次のようなものである。会場代(自治会集会所使用料)の値上げや以前学習場所として使用していた喫茶室が使えなくなる等の場所にまつわる問題⁵⁾はあれど、それらの問題について、会員とスーパーバイザーの皆で解決方法を探っていくこと、それ自体が「学び」につながっている、とビーンズは考えている。このように、「問題」もまた学びの糧として捉える背景には、彼女らが展開してきたプレイセンターという場が、親もまた学習会を通じて「学び」、成長するための場であると考えていることが関連しているものと思われる。

おわりに

ビーンズがプレイセンターに出会ってから、ピカソを開くまでには2年を要しており、そこ

に至るまではプレイセンターの理念を広めるための地道な、粘り強い活動があった。今日のピカソは、この、地道な準備期間に支えられているように思われる。なぜならば、プレイセンターが軌道に乗る、すなわち親の協働によって運営されていくためには、何よりも参加者である親たちがプレイセンターの理念を理解することが重要であるからだ。ビーンズは、先にプレイセンターという場所を作ってしまうのではなく、その時点で自分たちが持っているもの「知識・人脈・経験」で可能な範囲でプレイセンターの理念を実現できる場（エンジョイ！プレイセンター）を作り、それを積み重ねていくことでピカソを作り上げた。彼女たちの「パーフェクトを目指さない」という姿勢が、大きな実を結んだのである。

（相良亜希）

<注>

- 1) 日本プレイセンター協会は、ニュージーランドのプレイセンターをモデルにした「親たちによる幼児教育活動」を支援することを目的として、2000年9月に発足した。プレイセンターに関する広報活動や教育活動を主な業務としている。スーパーバイザー養成コースの開講、プレイセンター参加者のための学習テキストの発行などを通じて、日本におけるプレイセンター活動を支援している。また、ニュージーランド・プレイセンター連盟との交流事業等も行っている。
- 2) 現在の会員数は、42名。小平市、国分寺市からの参加者が多い。
- 3) 日本プレイセンター協会『プレイセンターへようこそ』（p.20.）において、「リーダーシップとは、グループの目標に向かって物事を進めていくことです。（中略）リーダーシップに求められるのは「感受性」と「柔軟性」であって、学習や経験によって誰もリーダーになれます。プレイセンターでは、最初スーパーバイザーがリーダーシップの責任を多く持ちますが、時間とともに、その責任をメンバー一人一人が担うようになることが期待されます。」と説明されている。
- 4) 現在、約20名が在籍。定期的集まりを持っているほか、スーパーバイザーが不在のとき、プレイセンターにサポートに入ったり、「エンジョイ！プレイセンター」にサポートとして参加したりしている。2005年にはスーパーバイザー養成講座を11名が受講した。
- 5) 公的施設は一団体につき使用回数に制限がある等、ピカソにとっても場所の問題は大きく、施設等の資源のありかについてコーディネートをしてくれるような機関（部署）が求められている。また、プレイセンター活動を軌道に乗せるにあたって、場所をどのように確保するかは大きな問題であるとビーンズは指摘しており、プレイセンターの普及のためにも、場所の問題の解決策が求められているといえよう。

<参考資料>

- ・ 足立隆子、石川あき子、海田みどり『家族と一緒に成長する「プレイセンター ピカソに集う親子達」』日本プレイセンター協会、2004年
- ・ 日本プレイセンター協会『プレイセンターへようこそ』日本プレイセンター協会、2001年